

STORY

過去なのか、未来なのか。

架空の国の架空の町「ウィルヴィル」は、海と火山に囲まれた小さな島にある。

動物園で働くトピーアスは、祖母ドンドンダラと貧しい生活を送っている。

幼なじみのパブロとは何をしても一緒だ。パブロはグンナルが司祭を務める教会で働いている。

この町で絶対的権力を握っているのが、ドン・ガラス・エイモスである。

エイモス家は祖父の代から町を牛耳り、市町も警察署長もエイモス家に逆らうと、即座に首をすげかえられる。

ガラスと彼の三人の娘(長女バララ、次女テン、三女マチケ)は、ガラスの母ジャムジャムジャーラ、何番目かの後妻のエレミヤと共に、手下でもある多くの使用人たちを従えて巨大な邸宅に住んでいた。

執事長ヤルゲンがガラスの忠実なしもべであり、元コック長のアリストも同様である。

アリストの妻メメは、亡き我が子の面影を追い求めながら、邸宅のメイド長としての仕事をこなしている。

ふとしたことからエイモス邸に足を踏み入れたトピーアスは、

ガラスに目をかけられ、ガラスのもとで働くことになった。

パブロも教会を辞め、喜び勇んでガラスの手下となる。それは二人の小学校時代の教師で、

今は反ガラスの地下組織を束ねるベラーヨを裏切ることを意味していた。

一方、町には見知らぬ者たちもやってくる。

密航者のヤンはエイモス家の祖母ジャムジャムジャーラの危機を救ったことでエイモス家に招き入れられていた。

錬金術師のダンダブルは、不思議な力を持つパキオテを助手にしてどこからか現れ、

町の人々に怪しい錬金術を披露して一儲けしようと企んでいる。

トピーアスとパブロが服をみつらえるために連れていかれた仕立屋のローケには、一人娘のレティーシャがいる。

父娘は「ヒヨリ」と呼ばれ、この町で迫害を受ける階層に属している。

かつて、ガラスの父ナイフに理不尽な暴行を与えた犯人と目される者は、

ガラスの祖父によって火あぶりの刑に処された。

その関係者も背中一杯に大きな焼印を押され、常に腕章をつけて生活することを義務づけられるようになり、

彼らの血縁者、子孫も「ヒヨリ」として同様の仕打ちを受け続けているのだ。

暴力が支配するウィルヴィルで、はからずも支配者側の立場となったトピーアス。

彼を取り巻く環境は劇的に変化し、不穏な空気が町全体を覆い尽くしていく――。





Go Morita

森田 剛 / トビーアス

埼玉県出身。1995年「MUSIC FOR THE PEOPLE」でV6のメンバーとしてCDデビュー。グループ内ユニットComing Centuryとしても活動。俳優として幅広いジャンルで活躍する。舞台はいのうえひでのり演出「荒神」「IZO」、宮本亜門演出「金閣寺」ではNY公演も好評を博した。蜷川幸雄演出作品には「血は立ったまま眠っている」に続く出演となる。ほかにNHK大河ドラマ「平清盛」など。V6の最新シングル「ROCK YOUR SOUL」がリリース中。また3月から全国ライブツアーがスタートする。



今やることに意味のある役

「血は立ったまま眠っている」の時もそうでしたが、蜷川さんの稽古は、自分が持っているものや考えていることを、まず見せることから始めてくださいます。だから自分がやりたいことを、最初にある程度やらせてもらえる。その上で言葉や動きなど、それ以上のものを引き出してくださいというか。役者として学ぶべきことが、たくさんある現場だなと思います。

トビーアスは、本当に純粋で内気な青年。でもそこを守っているだけでは、ちょっとつまらない気がするんです。今のトビーアスだと声も小さいし、

動けないし。パブロ役の満島真之介くんは隣で汗びっしょりなのに(笑)、トビーアスはいつも涼しい顔をしていて。何とかそこから抜け出したいとは思っているんですが、答えはまだ見つかっていません。満島くんと一緒に悩んでいる段階ですね。あと、なぜこれほどまでにおばあちゃんっ子なのか、正直分かっていません。両親に理由があるんじゃないかと、足が悪いことに関係しているんじゃないかとは思いますが……。とりあえず最後まで通して稽古した時に、何か見えてくるものがあるのかもしれない。

これだけたくさんの方が出られるので、そこで自分にどんな化学反応が起きるのか、すごく期

待しています。でもそれは、自分が一方的に感じている意味がないこと。今はまだセリフを言っているだけで、届いていないなって気がするんです。だからもっと自分のエネルギーを出して、周りの方々に認めてもらう。そうなった時に初めて、化学反応は起きるものじゃないかなと。そしてトビーアスが、より生きた感じになるといいなと思っています。トビーアス自体は、実はそんなに楽しくない役だと思うんです(笑)。感情を出す役の方が、楽しいことは楽しいですから。でも今の自分にとっては、絶対に必要な役。だからこういう役を、このタイミングでやれるというのは、すごく意味があることなんじゃないかなと思います。

Masanobu Katsumura

勝村政信 / ドン・ガラス

埼玉県出身。ニナガワ・スタジオを経て、1987～92年、劇団第三舞台の主要メンバーとして活躍。以後、舞台、映像で活動中。近年の出演作に、蛭川幸雄演出「コースト・オブ・ユートピア〜ユートピアの岸へ」「ファウストの悲劇」「あゝ、荒野」「シンペリン」「ボクの四谷怪談」、タニノクロウ演出「ちっちゃなエイヨルフ」、鈴木勝秀演出「ピリパー」、ドラマ「ドクターX〜外科医・大門未知子〜」など。サッカー番組「FOOT×BRAIN」のMCを務めている。



“無理なもの”と肩を組む

同じ戯曲を別演出でやる企画は今回で3度目になりますが、僕、唯一全作に出演させていただいているんです。周りが思うほど、やってる当人たちは気にしていませんね。まあ演劇で事件を起こすことは非常に大切だと思うので、面白い企画だなと思うくらいです。

KERAさんのことは劇団健康の時代から知っていました。当時からバンドをやっていたスターだったので、なんとなく年上の人だと思っていたんですね。お互いに敬語でしゃべっていたんだけど、先日KERAさんが「勝村さん、

歳が一緒なんだからそろそろ敬語やめませんか」って(笑)。「それもそうだね」って言ったけど、よく調べたら向こうが一学年上だった。となるとやっぱり敬語使わなきゃな(笑)。

初めてKERA作品に挑むことになりましたが、僕がドン・ガラスを演じるのは相当意外だと思うんですよ。だってこれ、70歳近い役ですから。町を牛耳るマフィアのボスみたいなキャラで、昔でいったらジャン・ギャバンやマーロン・ブランドが演じる役でしょう。だから僕も(KERAバージョンの)生瀬さんも難しい挑戦なんです(笑)。身体が元気なのに老成した感じを出すのは非常に難しい。映像ならその年齢の俳優さんが

演じれば済むけれど、舞台は動き回らないといけませんからね。まあ、僕がいつも無理とか言うのは、一回そう認めないと先に進めないからなんです。一度認識した後、“無理なもの”というバケモノと肩を組んで稽古場に行くしかないと考えて、取り組んでいるんです。

今回、いつもとくらべて、非常に稽古時間が少ない。これは率先して動かなきゃダメだなと思って、キャストの皆さんと個別に集まって、話し合いながら稽古をしています。でも「ハードは蛭川さんが作り、芝居は自分たちで作る」が、昔から僕らには当たり前のことですから。今、自分ができることをやっていくのみです。

Mieko Harada

原田美枝子 / バララ

東京都出身。1974年、映画「恋は緑の風の中」で俳優デビュー。76年、映画「大地の子守歌」「青春の殺人者」で高い評価を受け、以後、多くの映画を中心にドラマや舞台でも活躍している。主な出演作に、映画「乱」「火宅の人」「絵の中のぼくの村」「愛を乞うひと」「雨あがる」「60歳のラブリーター」「ふがいない僕は空を見た」など。蛭川幸雄演出の舞台は「リア王」「かもめ」「三人姉妹」に出演。今回は2005年、宮本亜門演出「メアリー・ステュアート」以来の舞台出演となる。



虚構の世界に真実を

以前に蛭川さんの作品に参加したのはもう10年以上も前になります。演出家や映画監督で今あれほどパワーのある方は少ないと思うので、声をかけてもらえた時に舞台をやっておこう、恥をかいておこうと思って今回「やるやる」って言っちゃったんですけど……。私、舞台出演自体が7年ぶりなんです。舞台空間に身体が慣れていないので一番ヘタかもしれないぞ、と。ほかの皆さんはベテランの方ばかりだし、若い満島くんとか初舞台の染谷くんにしても、何でこんなに上手にやれるの!? と驚いちゃって。三姉妹の妹

役の中嶋朋子ちゃんや宮本裕子ちゃんも舞台経験が豊富なので、私よりお姉さんな感じですよ。「北の国から」の時は私が20歳くらいで朋子ちゃんが8歳くらいだったのに、それが姉妹をやるようになるとは……。不思議な気持ちですね。

バララのようなちょっとトボけたキャラクターを演じるのは初めてです。よくこんなに面白く書いてくれたな〜とありがたくて、台詞のリズムや間合いがうまくハマれば、お客さんが笑ってくれるんじゃないかな。そこが楽しみです。蛭川さんには稽古の最初からいきなり「芝居が小さいんだよ!」なんてダメ出しをガンガンくらってます。三姉妹のイメージを「ヴェネチアの貴族だ

よ!」っておっしゃるんだけど、全然そういう風には見えず、いまだ(稽古場の)与野本町の三姉妹なのでなんとかしないと(笑)。この物語の虚構の世界をいかに本当に見せるかは、最初の出のシーンにかかっていると思うんですね。出だしのリズムをうまくつかんで、いい流れを作っていくみたいです。

私、今回がダメだったら舞台はこれで最後にして〜なんて言いつつも、このメンバーが集まっているだけでワクワクしますから絶対に面白い仕上がりになるだろうと思っています。そこに参加できることを存分に楽しんで、お客さんに笑っていただけるよう頑張りたいですね。

Shota Sometani

染谷将太 / ヤン

東京都出身。2001年から子役として活動を開始、幅広いジャンルの映画、ドラマで活躍を続ける。11年、園子温監督の映画『ヒミズ』にてヴェネツィア国際映画祭のマルチェロ・マストロヤンニ賞を受賞、世界的に注目を集める。近年の主な映画に、滝田洋二郎監督『天地明察』、三池崇史監督『悪の教典』ほか。2013年も佐藤祐市監督『ストロベリーナイト』、若松孝二監督『千年の愉楽』、三谷幸喜監督『清須会議』など、公開予定映画が多数控える。今回が初舞台。



異物としてのヤンと僕

僕はこれが初舞台で、稽古に参加するのも初めてですが、毎日すごく楽しいです。今日も勝村政信さんから、「杖を拾う時、何か一つ動きを入れるだけでもっとよくなるよ」とアドバイスをいただいて。一つそこにアクセントを置くだけで、演劇としてお客さんに見せることが出来るんだなと。あとたまに、自分でもビックリする時があるんですよ。今までだったら絶対にしないような動きをしていることがあって。そもそも僕、芝居をする時にあまり動くタイプではないんですね。それが「あれ、俺動いてる」みたいな(笑)。子役から13年間役者をやってき

て、まだこういう新しい発見があるのはすごく刺激的ですし、単純に嬉しいなって思います。

もともと僕は、役のバックボーンとかを気にしないタイプなんです。そこに囚われると、いろんな可能性がなくなっちゃうので。そういうものを全部抜きにした時の、ヤンとしての佇まいや人への対応の仕方。そういうところから役を掴んでいこうかなと。それと脚本を読んだ時、ヤンってすごくかわいそうな子だって印象を受けました。最初は単なる凶暴な男なんですけど、だんだん人間味が出てくる。だからシーンごとに、ラストに向かっていく準備をしているというか。そういう組み立て方は意識しています。

日常生活の中にも、一つの歯車が狂うだけで結果的に大きなものが崩れてしまうことってあり得ると思うんです。それはこの作品にも言えることで、現実離れた世界観の中、そこをちょっと誇張して描いているだけなのかなと。この作品の面白さは、そういうところにあると思っていて。そしてその狂った歯車というのが、つまりはヤン。街の中にヤンという異物が入って来ることで、すべてが狂い始めてしまう。さらに言うと、僕もこの中では役者として異物なんですよ。ほかの皆さんに比べて、絶対的に経験値が違いますから。そういう意味でも、今回ヤン役で本当によかったなと思います。

Tomoko Nakajima

中嶋朋子 / テン

東京都出身。1981年テレビドラマ『北の国から』に出演、以後20年以上にわたり蜚名を博す。多くのドラマ、映画のほか、近年は舞台での活躍も目覚ましい。主な舞台に、鶴山仁演出『ヘンリー六世』リチャード三世、岡本健一演出『恋人』、青山真治演出『おやすみ、かあさん』ほか。蜷川幸雄演出作品は『グリークス』『幻に心もそぞろ狂おしのわれら将門』『オレスティス』『血の婚礼』に出演。山田洋次監督の映画『東京家族』が1月19日公開。



肉体を通して生きる言葉

チューホフやギリシャ悲劇などいろんな要素が詰まっているけれど、役者としてそれを全部踏まえておくべきかという葛藤を投げつけられるホンですね。ただ、いつも作品や役柄についてはあまり考えすぎないようにしています。決め込んじゃうと、稽古場で起こることに柔軟に対応できなくなったり、せっかく生まれたものを取りこぼしちゃう気がして。テンという女性についても、今感じているのは“生き物として欲求に素直な人”ということだけ。その感覚は好きなので、うまく表現できるといいなと。蜷川さんには今のところ「品が

ねえんだよ」と言われてますね(笑)。その“品”は言葉通りの意味だけでなく、何か異質のエネルギーとして際立っていてほしいという希望を投げかけられているはずなんです。そのチューニングを探りながら核になるものを作っていくかなければ、またチャレンジだなと思ってやっています。

不思議なのは、台本に書かれた字面で感じたものと、役者の肉体を通した言葉とでは大きく変化するんですね。そこがやはりKERAさんのホンの醍醐味なのではないかと感じています。頭で勝手に組み立てようとしても難しいんですけど、役者が立ってしゃべったら、急に全部が何かを飛びこえて、パシパシッと動き出すので、

いつも稽古場で驚いていますね。今後も何が出てくるのか目が離せない、怒濤の日々になるだろうと(笑)。それはそれでこの物語の世界観と近いものがあるんじゃないかな。

蜷川さんの稽古場ではいつも「ちっちゃくなくなる自分はいないか?」と問いただすチャンスを得ているように感じます。芝居に嘘があったり、ただ取って付けた、切って貼ったみたいなことをすると、すごく怒られる。役者として潔くなれる瞬間があるのがいいなあ、と思うんですよ。今回も手放しでどこまで行けるか、自分がナマモノでいることをどれだけ楽しめるかが課題のような気がしています。

Hiroki Miyake

三宅弘城 / パキオテ

神奈川県出身。1988年劇団健康に入団し、93年「ナイロン100℃」の旗揚げより参加。舞台の他、テレビ・映画と活躍の場を広げている。近年の外部出演に、岩松了演出「マレーヒルの幻影」、いのうえひでのり演出「鋼鉄番長」「シレンとラギ」、倉持裕演出「鎌塚氏、放り投げる」「鎌塚氏、すくい上げる」などがある。パンクコントバンド「グループ魂」では「石炭」としてドラマを担当。2013年は、映画「だいじょうぶ3組」、「中学生円山」の公開を控える。



パンクな“監督コント”に釘付け

KERAさんのもとで芝居を始めた純粹培養な僕が(笑) 蜷川バージョンに入っているのは面白いことですね。ちょうど一年前くらいにお話をいただいて、KERAさんに「蜷川さんからお声がかかりました」と報告したら、「おお～、いいじゃん」とKERAさんも面白がってくれました。KERAバージョンの舞台は、もう観に行きましたよ。絶対に影響されない自信があったし、やっぱりまったく違う舞台に仕上がっていましたね。向こうのキャストも気になるようで「そっちはどう?」と聞かれたりして、「ラップなんだって?」なんて、

どうもどこからか情報が漏れているらしく、ぼちぼち知られていましたけど(笑)。

パキオテの役はよく「当て書きみたい」と言われます。稽古場ではまずとにかく動いてみるんですが、この間初めて蜷川さんに「いろいろやってくれてありがたいけど、あんまり動かないほうがいいみたいだね」と言われました(笑)。僕、蜷川演出初体験なので、稽古に入る前は結構緊張してたんです。でも始まったら楽しくてしょうがない! 蜷川さんがまるで“監督コント”みたいで面白くて、「なんだお前、上野の西郷さんか! 隣に犬、置くぞ!」とか気が利してるんです。それにやっぱりカッコいいですよ。素舞台にこだ

わってらっしゃるけど“座っていた”というセリフがあるので、「チキショー、じゃあ椅子置くか!」って悔しがったり。美術や小道具で説明せずにやりたいということとか、もうアナーキーですよ。パンクだと思います。共演の皆さんも素晴らしい方ばかりで、もう蘭さんなんて心から「メメさん!」と言えますよ(笑)。

いつもナイロン100℃やKERA作品をご覧になっているお客さんにも、きっと新鮮に感じいただける舞台になると思います。まあ僕が一番楽しんでいることは間違いないです。早く蜷川さんの世界に染まって、「三宅」と呼び捨てにされることが今の課題ですね。

Yuko Miyamoto

宮本裕子 / マチケ

東京都出身。第6回読売・杉村春子賞 & 優秀女優賞、第3回紀伊國屋・個人賞受賞。最近の舞台に、サイモン・マクパーニー演出「春琴」、鶴山仁演出「兄おとと」、手塚とおる演出「大と小」、西浦正記演出「ヴェロニカは死ぬことにした」など。蜷川幸雄演出作品は「十二夜」「グリークス」「かもめ」「パンドラの鐘」「夏の夜の夢」「たいこどん」ほか。また、映画「歓喜の歌」、ドラマ「大切なことはすべて君が教えてくれた」などに出演。今年4月新国立劇場小劇場にて、ジョン・E・マグラ演出「効率学のススメ」に出演。



天真爛漫な残虐性

KERAさんの戯曲を演じるのは初めてなので戸惑いも多いのですが、関係性の面白さや、リズム感のあるセリフのやり取りを楽しんでいます。そして、どう、蜷川さんの世界観の中に存在し、三姉妹の末っ子・マチケとして打ち出していくのか……。色々と妄想しては試しています(笑)。

エイモス家は、ある意味単純明快なファミリーかも? 他者にとっては横暴で恐ろしい存在でしょうが、ファミリー内は愛に溢れてる。家

族は絶対的存在で年長者を尊ぶ。付き従う者には目をかける、しかし裏切りは絶対に許さない。子々孫々まで罪を背負わせる。みんな、激しい!(笑)

その中でもマチケが一番父親に似ていて、強引で傲慢。そして、生まれてすぐに母親が亡くなって、その分たっぷりパパや姉さん達から愛情を受けて育っているから天真爛漫。ただ、その中に潜む残虐性というのは、彼女が自覚していない分すごく怖い部分でもあって……。「私を傷つけた人を殺して何が悪いの???」みたいな……。まあ、マチケだけじゃなく、エイモスファミ

リーとはとにかく激しいんです(笑)。

リハーサル前に三姉妹で、「どうやるか?」と案を出し合ってる時がとても楽しい! お二方とは、それぞれに共演経験があるので、初対面の垣根がない分、一からお互いを探る必要がない。これは、この三姉妹を演る上でとても大きいと思います。私自身は二人姉妹の長女で、妹が一番の親友ですが、長女ゆえか、守らないと……という意識がどこかにある。甘え下手なんです。美枝子さんも朋子さんも、俳優としては勿論のこと、女性としても素晴らしい方達なので、すごく頼って、すごく甘えています(笑)。

Sumika Nono

野々すみ花 / レティーシャ

京都府出身。2005年、宝塚歌劇団にて初舞台。同年花組に配属。07年にはパウホール公演『舞姫-MAIHOME-』でヒロインを務めるなど、早くから注目を集める。09年、宙組に組替えとなり、同年8月『大江山花伝』でトップ娘役に、『銀ちゃんの恋』『カサブランカ』『誰が為に鐘は鳴る』『ヴァレンチノ』『美しき生涯』など多くの代表作に恵まれる。12年7月、『華やかなりし日々』で退団。今回が退団後初めての舞台出演となる。



生身の女性への第一歩

宝塚歌劇団を退団して初のお仕事なので、スタッフ、キャストの皆さん全員が初めてお会いする方ばかり。稽古初日の顔合わせではとにかく緊張してしまって、冷や汗は出るし、本読みも声が震えてしまったくらいでした。皆さんがあまりにも自然体にどんどん読み進んでいたのも、その日はどん底まで落ち込みましたね。でも、次の日から「できないのは当たり前だ、もうやるしかない!」と覚悟を決めて入ったら、今は稽古場にいるのが楽しくて仕方がなくて(笑)。他の方の演技を見ているだけでワクワクしますし、

蛭川さんの一言、二言がすべて自分にも当てはまると感じて聞き入っています。

作品はKERAさん独特の世界で、人間の欲やエゴが渦巻く大人の寓話といった感触。台本を読み返すたびにいろんな発見があって面白いです。レティーシャは、そんなエゴに満ちた大人の世界を滑稽に見るような冷静さや客観性を持ちながら、同時に純粹で汚れない、生命力にあふれた女の子でもあると思っています。若者の健気さ、危うさといった部分を出してあげたい。また今回、蛭川さんが「宝塚では優等生としてやってきたから、今度の舞台ではお土産として別のものを持たせてあげる」と

おっしゃって、カッサンドラの役も与えてくださったんですね。キャストの皆さんもたくさんのことを教えてくださいるので、とても刺激的で幸せな日々です。

ずっと走り続けてきた宝塚時代を終えて、ひとまず一つやり遂げたような感覚でいます。これからはじっくりと焦らずに、多くの方からいろんなものを吸収させていただきながら進んでいきたい。宝塚では娘役だったので今後も同じ女性を演じることに変わりはないんですが、以前は非日常的な夢の世界での娘役を一つの理想として演じていました。これからは生身の女性としてリアリティをもって舞台に立てるよう、今回の役を大事に演じていきたいと思っています。

Keita Oishi

大石継太 / アリスト

大阪府出身。1983年よりニナガワ・スタジオに参加。『マクベス』『お気に召すまま』『恋の骨折り損』『ムサシ』『コースト・オブ・ユートピア』『ユートピアの岸へ』『十二人の怒れる男』『血は立ったまま眠っている』『たいこどんどん』『下谷万年町物語』『シンペリン』『しみじみ日本・乃木大将』『ボクらの四谷怪談』など、数多くの蛭川幸雄演出作品に出演。そのほか、鶴山仁、木野花、鈴木勝秀、鈴木裕美、野田秀樹、青木豪などの演出作品に出演している。



こうなったら意地でも

毎度のことですが、蛭川さんに叩かれながら稽古をしています。立ち稽古初日から「今の自分の見え方を信用してんじゃねえ!」と怒られました。僕はどうしても「普通の人」になってしまうんです。亡くした子供のことをずっと思い続けている、どこか病んだ男には見えないということでしょう。蛭川さんとは長い付き合いなのに、しっかりしろよ俺、と自分に向かってダメ出しです。さらには「10kg痩せろ!」とも指令が下り、たまたま人生初のダイエット中です。10日間で3.7kg落としました。何だか役者気取りというか、ロバート・デ・ニーロじゃ

あるまいし、とも思うと恥ずかしいんですが、痩せるより前に僕が芝居をしっかりとすればいいだけですよ。ただ、実際にダイエットしてみると、自然にエネルギーが失われて元気がなくなっていく。少し強引ですけど、ああ、こういう感じかもしれないという感触は得つづあります。

メメとアリスト夫婦にとっては、死んだ息子ピョントが心のよりどころです。メメはもちろん、アリストもいないはずの子供が確かに見えている。それがパキオテのまじないによるものなのか、想像の中で勝手に育ったものなのか、今はまだ自分でも答えが出ていません。ヒヨリである仕立屋のローケとの関係性も、いろいろな読み方ができる

んです。終盤でローケがアリストに呼び掛けるセリフがあって、もしかしたらローケはアリストの兄さんかもしれない……と勝手に思ったり。全然違っているかもしれませんが、そうやって誤読していくことも役を作るうえで大切なプロセスかなと思っています。

ただ、僕自身が大声で怒鳴ったりすることがあまり得意ではないので、アリストが激昂する場面、メメに対する怒りのぶつけ方も課題です。と、こうして挙げていくと克服すべき点ばかりですが、そこは役者なのでどうにかしないと。蛭川さんに対する秘策はないので、まずは意地になってダイエットに励むつもりです。

Makiko Watanabe

渡辺真起子 / エレミヤ

東京都出身。日本映画に欠かせない女優として活躍し、ドラマ、舞台にも出演。主な映画に、諏訪敦彦監督「M/OTHER」、河瀬直美監督「穢の森」、山崎裕監督「TORSO」、小林政広監督「愛の子感」「ギリギリの女たち」、園子温監督「愛のむきだし」「ヒミズ」など。蜷川幸雄演出の舞台は「ルネッサンス・スタジオ93春」「あゝ、荒野」に出演。中野量太監督「チヂを撮りに」(2月16日公開予定)にて、第55回アジア太平洋映画祭・最優秀助演女優賞受賞。



つくり過ぎず、薄すぎず

高校生の頃、KERAさんのバンド「有頂天」のライブに行っていました。インディーズバンドが全盛期で、子供ながら面白い人たちだなあと。後に舞台も拝見するようになって、独特のユーモアと毒にあふれた作品を楽しませていただいています。好きなことがすごくハッキリある方という印象ですね。

この作品も決してハッピーな物語ではないけれど、ウェットにはならず、かといって乾き切っているのでもない。人物同士の距離感もすごくKERAさんらしいと思います。

穏やかではない人たちの穏やかではない話ですが、ある種のエネルギーに惹かれます。たくさん登場人物が交錯するので、その中から勝手に役柄が際立って見えてくるのではないかと考えています。どんなエレミヤになるのかは見てのお楽しみということで(笑)。

もともと、役について自分の中でつくり込んで持ち込むことはあまりしません。人物の背景は想像しますが、と、言いつつ、俳優の“業”と言いますか、影が薄いのもどうかと感じている自分もいます。映像の場合はクローズアップがありますが、舞台は空間なので、お客さんほどこを見て自由です。その中で存在が

弱くなってしまっただけならいいだろう、と。本来はできれば後ろに引いていたいタイプなのですが、そんなことを言っている場合ではないですね。精一杯に頑張って、自分の役割を果たしたいと思っています。

心身ともに型にはまらず自由でいたいという思いが強いのですが、そのためにも、一步一步、新鮮な気持ちで、物語に向き合いたいと思っています。舞台でこうしてお声がけしていたからには、きちんと応えたい。蜷川さんは「これくらいでいいや」という妥協がない方。憧れています。追いつけるとは思えませんが、後から全速力で追いかけていきたいと思っています。

Seminosuke Murasugi

村杉蟬之介 / ペラーヨ

群馬県出身。1994年より大人計画に参加。舞台、映画、ドラマなどで幅広く活躍。主な出演作に、舞台では松尾スズキ演出「欲望という名の電車」「ウェルカム・ニッポン」「ふくすけ」、青木豪演出「真夜中のパーティー」、蜷川幸雄演出「あゝ、荒野」、映画「必死剣鳥刺し」「宇宙で一番ワガママな星」「サビ男サビ女」「おかえり、はやぶさ」、NHK大河ドラマ「平清盛」などがある。パンクバンド「グループ魂」では「ババ君」として結成時から参加。



お芝居の楽しさを学んだ人

「あゝ、荒野」で初めて蜷川さんの作品に参加させていただいたんですが、これが衝撃的に楽しかったんです。まずはそのギャップ。蜷川さんという、やはり最初は怖いイメージしかなかったんですが(笑)、怒るにしてもすごく愛があるんですよ。相手に対してしっかり言葉を選んでいらっしゃるし、すごく繊細。僕はあまり言われることはありませんでしたが、その分、すごく自由にやらせてもらえて。こんなに自由にお芝居をしたのは初めてでっかい。いつもは演出家に頼って動くことの多い僕が、「あゝ、荒野」の時は、こうしたら

もっとよくなるんじゃないかって、本番なのに毎日ちょっとずつ変えてました。役者になって18年目くらいで、芝居を積極的に楽しんでいいんだってことに気づかせていただいた。自分の役についてあんなに考えた作品はないかもしれません。だから再び呼んでいただけたのはすごく嬉しいです。また蜷川さんに会えるのが楽しみでしょうがなかったです。77歳の大ベテランでいらっしゃるのに、反骨精神に満ち溢れている。オープニングからいきなりラップですし、常に「絶対にKERAを裏切るから」ってことをおっしゃっていて(笑)。そういう蜷川さんのパンクなところに勝手にシンパシーを感じて、僕と性格が似て

るんじゃないかな、なんて思っていました。僕はちょっとマイナスすぎるんですが、「だったら、やってやろうじゃねえの」みたいなエネルギーで生きてるので、僕もペラーヨ役として、皆さんの予想を裏切るよう頑張りたいと思います。ペラーヨは、心の中でぐつぐつ煮えたぎったものがあるけど、それを表に出さない人。そのためにも、中身の体温は、常に高いお芝居が出来ればいいのか。また森田剛さんと満島真之介さんの先生に見えること、さらに運動家としての貫録を出したいです。そして4時間という上演時間が、あっという間に感じられるようなお芝居が出来たらと思います。

Shinnosuke Mitsushima

満島真之介／パプロ

沖縄県出身。2010年、熊林弘高演出の舞台『おそろべき親たち』にて俳優活動を開始。デヴィッド・グリンドレー演出『エンロン』に続き、今回が3作目の舞台出演となる。故・若松孝二監督の映画『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』で森田必勝を演じ、報知映画賞新人賞、高崎映画祭最優秀男優新人賞を受賞、高い評価を得る。そのほかの出演作に、映画『大奥〜永遠〜』、ドラマ『梅ちゃん先生』など。今後の活躍が期待される若手俳優のひとり。



欲望むき出しの若者らしさを

僕は以前に蛭川さんの別の舞台のオーディションを受けたことがあり、それを蛭川さんが覚えていてくださったのと、若松孝二監督の映画『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』を観て頂き、今回のパプロ役に決めてくださったそうです。嬉しくもあり、責任も感じています。僕らの世代は、憧れと同時に「負けたくない!」と奮い立たせてくれるカッコいい大人の男性との出会いを求めている。映画の世界で自身のスタイルを貫き、僕にとって人生の宝になるような作品を作ってくださった若松監督と、舞台の世界で

計り知れないパワーを放っている蛭川さん。この連続の出会いをとっても幸せに感じています。

パプロはこの作品の中で一番人間らしさを持っているような気がします。若者が持っている好奇心や向上心、欲望がむき出しになっていて、コイツ一番“生”だなんて感じる。僕自身が「こうありたい!」と思う姿。そんな瞬間に、この役に出会えたことを誇りに思い、今の僕にしかできないパプロ像を作れたらと強く思っています。トビーアス役の森田剛さんは以前から、すごく男らしくて独自の空気を放つ力強い人だと思っていました。僕は沖縄で自由奔放に育ってきて、森田さんは早くから芸能の世界に入って、ずっとトップを走り続けてる。

両極端な二人だけど、どこか似た熱さを持っている気がするんです。森田さんとの場面では何をぶつけてもスツと受け止めてくれるので本当にやりやすいし心強い。本番ではもっと大胆に、困っちゃうくらいやってみようかなって思ってますけど(笑)。

蛭川さんに負けたくないという想いは、今稽古場にいる誰よりも強い気がします。毎日、真面向勝負で闘うぞ!という気持ちで稽古に入ると、それを蛭川さんが笑顔で「バカ!」と喜んでくれる。人との縁を大切に、皆さんの胸を借りて愛のあふれるエネルギー全開のパプロを息づかせたい。若者の危うさ、何が起こるかかわらない瞬間を見せられるよう生き抜きます。

Kenichi Ishii

石井愼一／ヤルゲン

群馬県出身。1965年に初舞台。71年に蛭川幸雄と出会い、『テンペスト』『夏の夜の夢』『十二夜』『雨の夏、三十人のジュリエットが還ってきた』『十二人の怒れる男』『身毒丸』『あゝ、荒野』『下谷万年町物語』など数多くの作品に参加。所属する劇団東京ヴォードヴィルショー公演や、森新太郎演出『ゴドーを待ちながら』、横内謙介演出『オレピアを聴きながら』、宅間孝行演出『笑う巨塔』、ドラマ『水戸黄門』『ウルトラマンメビウス』など幅広く活躍中。



ドンと40年、演出家と40年

まずホンを読んだ時に、作家はなぜこれを書こうと思ったのかをいつも考えるんです。KERAさんはやっぱり蛭川さんの演出を想定して、クロスも入れてきたんでしょうね。ところが蛭川さんは、「そう簡単に思った通りにやらないぜ!」みたいな偏屈ジジイだからね(笑)。

『桜の園』ではないけれど、権力を持った人間が構築したものはいつか必ず崩壊する。そんなメッセージが詰まった作品だから、ただの寓話では終わらないようにしないと。銅像は燦然と輝いていた権力の象徴。世界各地で革命が起きて

独裁者の銅像が倒されたりしているけど、権力者は墮ちてもなかなか死なないんですよ。

ヤルゲンはそんな権力者に忠実に仕えて40年。ドンに対して一歩下がってはいるけれど、反抗的態度も取る。僕も蛭川さんと芝居をやってちょうど40年くらいで、一応言うことは聞くけど、「うるせえなあ、このオヤジは!」なんてよく思うしね(笑)。ヤルゲンはドンと一緒に生き延びるための処世術を身に付けてるから、また次も権力者のところで掃除あたりから始めて実績を作り、執事長まで上り詰めるんだろうな……と、勝手にスピンの物語を作ってますよ。ヤルゲンの行動には理由が一切書かれていないけれど、一貫性はなくていいと思

う。観ている人が点と点を繋げてくれば、大きな四角や丸が見えてくるんじゃないかな。

それとKERA作品ならではの「笑い」は求められるところだと思うから、ちゃんと拾ってきたい。細かい部分もこだわって書いてあるなあと感じるしね。喜劇は真面目に書かないと面白くないですよ。丁寧な「振り」が後で倍の笑いになったり、逆に同じ言葉で泣かせたり。どう言ったら面白いかを考えながら読んでます。笑いだけじゃなく、KERAさんのホンのにも蛭川さんの演出にも、知的な面白さを探す楽しみがあってね。「あ、このシーンはあの映画に似てるかな?」なんて想像するのも面白いですよ。

Satoshi Hashimoto

橋本さとし／ダンダブール

大阪府出身。劇団☆新感線を経て、舞台、映像、ナレーションなど幅広く活躍する。「ミス・サイゴン」「レ・ミゼラブル」など大作ミュージカルにも主演。近年の舞台に、ケラリーノ・サンドロヴィッチ演出『噂の男』『東京月光魔曲』、長塚圭史演出『タンゴーTANGOー』、河原雅彦演出『時計じかけのオレンジ』、ジョン・ケアド演出『ジーン・エア』など。蛭川幸雄演出作品は『ハムレット』『ひばり』に続く出演。ほかに、NHK大河ドラマ『平清盛』など。

うさんくさを突き詰める

KERAさんが自分で書いて自分で演出する作品は経験してますけど、蛭川さんとのコラボレーションに参加させていただけるなんて役者冥利に尽きますね。自分の出番がない時も稽古場において蛭川さんが創っていく過程を見ているだけでも楽しいですし、得るものばかりです。KERAさんらしい群集劇にギリシヤ悲劇的要素も入って、一見嘘っぱちに見える世界観の核には人間の情愛も汚さも愚かさも含めたヒューマニズムが流れている。KERAさんの台本って、やっぱりどこか優しいんですよ。内容だけじゃなく、これ

だけたさんのキャラクターがいるのに、隅々の人間まで緻密に描かれているんです。そこに愛情を感じちゃうんですね。切り捨てたり、端折ったりしない。だから長くなるし、台本も遅くなるんですけどね(笑)。でも役者は手渡されたセリフを見ると、もう何も言えなくなってしまう。このセリフを早く覚えて自分のものにしていって思うんですよ。

ダンダブールは見るからにうさんくさい男です。そもそも錬金術師という存在自体がうさんくさい。無から命をつくり出す、なんて本気で言ってますから。倫理観も捨て去った人間だけど、心の支えにしているのはパキオテだったりするわけです。自分で自分を騙してきた男が、最後に

すぎるのが人間愛。パキオテに独裁的に接するのは、孤独を恐れる裏返しでしょうね。しかも上から視線のわりに、パキオテの独特な空気に振り回されてるのが面白い。実際、三宅弘城くんの予測不能な動きに翻弄されてる不器用な自分もいるので(笑)、この関係性が役柄にも反映されたら面白いだろうなと思っています。

今回の蛭川さん版はセットも非常にシンプルなので、「役者力」が問われると思うんです。どこから現れたかも分からない、嘘くささの塊のような男だけれど、赤い血が流れている人間としてちゃんと舞台に立っていたい。そこからお客さんに自由に想像してもらえたらいいですね。

Hiroshi Tomioka

富岡 弘／合唱隊員、警察署長

東京都出身。1981年、オンシアター自由劇場に入団。「上海バンスキング」「もっと泣いてよフラッパー」「クスコ」などの作品に出演。94年に退団後も映画、舞台で活躍する。蛭川幸雄演出作品は『オイディプス王』『カリキュラ』『エレンディア』『表裏源内蛙合戦』『コースト・オブ・ユートピア』『ユートピアの岸へ』『血は立ったまま眠っている』『あゝ、荒野』など。そのほかマキノノゾミ演出『探偵〜哀しきチェイサー』、塚崎彦演出『高野聖』『夜行巡査』など。

想定外のクロスに悶絶

蛭川さん演出の『オイディプス王』再演(04年)で初めてクロスを経験しました。ギリシヤの古代劇場での本番中に、えも言われぬ不思議な感覚を味わったんです。演劇の神様が本当にいるんじゃないかと思えて、そんな体験をしたので今回もクロスを頑張ろうと思っていますが、まさかこんなハードルが待ち構えているとは。僕がいた自由劇場は俳優も楽器が得意で音楽性が豊かというイメージがあるかもしれませんが、僕は「雰囲気勝負」のクチだったんです。そんな自分がラップでクロスなんて、非常に緊張しています。言葉を音に乗せること

がセリフを覚えるのとはまったく違うので本当に難しい。緊張し過ぎて、駐輪場に自転車を置きっ放して数日間気づかず、膨大な料金を払うハメになったりして。我ながら何をやってるんだか……。僕自身は深い信仰心があるわけではありませんが、40歳過ぎてから芝居の稽古に入る前に墓参りに行くようになりました。若い頃には考えもしませんでしたけど、お参りすると気持ちもスッキリしますよね。そういう意味での「祈り」は自分の中にあるけれど、西洋的な「祈り」は正直言ってピンと来ない。翻訳劇でも「神」という存在がつかみ切れないのと似ているかもしれません。今回KERAさんはどんな「祈り」を込めて書いたのか、

想像をめぐらせています。クロスだけでなく、芝居のパートも四苦八苦です。僕は役をカリカチュアライズ、戯画的にやりがちなんですけど、今回蛭川さんが求めているのはもっとリアルな感覚ではないかなと。ポン、とそこにいることができればいいんですが、これがまた難しい。警察署長は単なる駐在さんではなく、町を牛耳っているドン・ガラスの存在をより大きく見せる役割も担っている。蛭川さんが折々に投げてくださるヒントを糸口に、求められることに対して逃げずに向かって行かねばと思っています。目指す地点はまだまだ遙か彼方。日々精進あるのみですね。

Masato Shinkawa

新川将人 / ローケ

栃木県出身。実業団アイスホッケーで活躍し、富良野藝、ニナガワ・スタジオを経て現在に至る。蜷川幸雄演出作品は「コート・オブ・ユートピア―ユートピアの岸へ」「十二人の怒れる男」「ヘンリー六世」「ガラスの仮面―二人のヘレン―」「ジャジャ馬馴らし」「血の婚礼」「アントニーとクレオパトラ」「下谷万年町物語」「ボクらの四谷怪談」など多数出演。「海辺のカフカ」のジョニー・ウォーカー役も好評を得た。ほかにドラマ「遺留捜査」など。



無骨な職人は背中語る

個人的なことでスママセンが前の舞台で足をケガしてしまったので、今はリハビリのように稽古に参加している状態です。弱ってしまった筋肉を少しずつ元に戻しているところで。もうランニングまではオッケ―。もう少ししたらダッシュしても大丈夫だと主治医の先生が言ってくれました。でも実を言うと、蜷川さんの芝居でケガをしなかったのは数えるほどしかないんですよ。ええ、申し訳ないくらい、いつものことなんです(苦笑)。

なので今は慎重に動いているんですが、今回のローケという役柄が「こんなに動きのない役

は初めてかも……」という感じで。仕立屋の職人となると、無骨で厳格なイメージがありますよね。ウチの親父がそういうタイプで、余計なこと言わずに背中だけを見せて黙々と仕事をしている……そんな親父像でしょうか。ローケについては絶対に蜷川さんは細かく見て、言ってくるだろうなと思っています。なぜかという蜷川さんのお父さんが仕立屋さんだったんですよ。だから職人としての在り方を厳しく見るだろうなと。どこまで自分が対応できるかわからないけど考えられることはやってみようと思って、すぐに衣裳さんに採寸の仕方を教わりました。また娘のレティ―シャとの関わりでは僕自身に子供がいな

いので、子供への愛情をどう表現するかも課題ですね。ただ最近の蜷川さんはその時の稽古によってセットも何もかもどんどん変えていくので、最初から決め込まないようにしています。考え過ぎず、すぐに対応できる余裕を持っていなければと思うんですね。

いつも感じるのは、蜷川さんは僕ら以上に幕が開くまでの不安や恐怖心を持っているな、と。もちろん僕だって何度蜷川組を経験していても、稽古場で初めて自分が演じる時は緊張して逃げ出したくなる。しんどいけど、恐怖心があつたほうが楽しめるんですよ。今回も、やり甲斐のあるしんどさを存分に楽しもうと思います。

Kazuyo Mita

三田和代 / ドボンダーラ、ジャムジャムジャーラ

大阪府出身。俳優座養成所を経て、劇団四季にて「なよたけ」「オンディース」など数多くのヒロインを演じる。1984年に退団後は、舞台、映像と幅広く活躍。近年の舞台にマキノノゾミ演出「秘密はうたう」、栗山民也演出「キネマの天地」「まほろば」。蜷川幸雄演出作品は「にごり江」「ハムレット」「雨の夏、三十人のジュリエットが選んできた」など。読売演劇大賞最優秀女優賞を2度受賞するなど受賞歴多数。2004年、紫綬褒章受章。



すべての輪が繋がっている

KERAさんにお目にかかったことはありませんが、芯がとても温かい人ではないかと想像しています。残酷なシーンでも陰湿にならず、ユーモアと爽快感があって。紗がかかったような深い森があり、精霊が地上と天空を行き来している……そんなイメージが浮かぶ世界です。

でも、役者としては人物のリアリティーを探すだけ。108歳の双子の姉妹という役ですが、二役という意識はありません。ドン・ナイフに対する愛の深さは二人とも同等。妹は恋人で終わり、姉は結婚したけれど、どちらが被害者でも加害

者でもない。二人とも互いを責めるというよりも、自己否定しているんです。幸も不幸も背負いながら、一人の男を愛し続けた。その、ただごとではない執着心が、彼女たちを108年も生かし続けてきたエネルギーでしょうね。

この作品ではあらゆる人物の中に、純粹なものと邪悪なものが表裏一体で共存しています。もともとは非常に純粹な「祈り」であっても、思いが巨大化すると、醜悪な「怪物」にもなりえる。一心にお祈りしている人を横から見たら、化け物のように見えるかもしれませんよね。そうした人間の様々な顔が描かれている作品であり、題名だと思っています。ドン・ガラスにしても、あれだけ残酷な男なのに、生き

物にはものすごい愛情を注いでしょ? そうして多角的につくりあげていった人物たちが、生き生きと躍動するような舞台にできたらと思っています。この作品は一見、毛色も質感もまったく違うシーンが並んでいるように見えます。でも一つ一つは独立して見える「輪っか」が、実は鎖状に繋がっている気がするんですね。KERAさんの頭の中にあるイメージが各シーンにパラパラと撒かれているような。だから台本を読み込むというよりも、ほかの人のシーンを見ているほうが自分のヒントになるんですよ。これは理屈ではなく、感覚的なものですけれど、五感を研ぎ澄ませてヒントをつかみたいですね。

Ran Ito

伊藤 蘭 / メメ

東京都出身。1973年、キャンディーズの一員としてデビュー。78年に解散後、80年より女優としての活動を開始。テレビドラマ、映画のほか、81年の夢の遊眠社「少年狩り」「ゼンダ城の虜」を皮切りに舞台でも活躍している。近年の主な舞台に、いのうえひでのり演出「怪談 牡丹燈籠」、ケラリーノ・サンドロヴィッチ演出「東京月光魔曲」、岩松了演出「シダの群れ」、梶幸彦演出「悼む人」など。蜷川幸雄演出作品は「血の婚礼」に続く出演となる。



夫婦の絆、パキオテとの絆

KERAさんの作品は「東京月光魔曲」でも経験させていただきましたが、今回は人物の関係性がより明確になっている気がします。誇張はされているけれど、「こういう人、いるかもしれない」と思える人物も多いです。KERAさん特有のどうしようもなく可笑しい部分が随所にあって、稽古をしているのも楽しいですね。その一方で、心に突き刺さるような痛さや、叙情的な切なさもしっかり盛り込まれているんです。「笑い」との振幅の大きさがあるからこそ、人間の負の部分や哀しさが効いてくるのでしょうか。KERA

さんご自身がおっしゃるように、まさに「ブラック・ファンタジー」という言葉がぴったりです。メメは、亡くした子供の面影を追い求めて生きています。ピュアなパキオテの神通力を信じ、彼女には本当に子供が見えるようになったのでしょうか。出来るだけ周囲を見渡せる客観性を忘れず、自分が置かれた環境に対する柔軟な適応力や、女性らしいまろやかさも出せるようにしていきたいです。それにメメの夫であるアリスト役、大石継太さんの目を見ていると何か通じ合うものがある、自分だけで稽古しているとは気づかないことがたくさんありますね。この夫婦のお互いに対する愛情の深さがどの程度なのか、まだつか

み切れていない状態ですが、大石さんと夫婦の絆を感じながら探っていけたら、と思っています。パキオテの三宅弘城さんとは先日初めて一緒に稽古をしたんですが、とてもいい感じです(笑)。稽古前にアイデアを出し合いながら、「抱き上げていいですか?」「どうぞどうぞ」「怖くないですか?」「大丈夫!」と、すでにメメとパキオテのような信頼関係が(笑)。蜷川さんの稽古場では毎日が本番のような緊張感です。セリフにもあるように即応力が求められるんですが、皆さんの瞬発力に触発されています。私も自分自身と闘って、お客さんの想像力を刺激する舞台を創りたいと思っています。

Ikko Furuya

古谷一行 / グンナル司祭

東京都出身。劇団俳優座を経て、TVドラマ「金田一耕助シリーズ」や「金曜日の妻たちへ」「失楽園」「オレゴンから愛」などの話題作で主演を務めるほか、映画、ドラマ、舞台で幅広く活躍する。近年の主な舞台に、板垣恭一演出「奇跡のメロディ 渡辺はま子物語」、星田良子演出「招かれざる客」など。蜷川幸雄演出作品は「雨の夏、三十人のジュリエットが還ってきた」に続く出演となる。ほかに、ドラマ「十津川刑事の肖像シリーズ」など代表作多数。



奉仕するのは神よりも恋

初めて参加するKERA作品ですが、普通であればあり得ないことが堂々で行われている。その可笑しさがKERAワールドなんだろうなと面白く台本を読みました。最後のシーンは映像としてイメージが湧いてきましたね。自分自身、今までに演じたことのない役どころですから、頑張らないと。グンナルは最も「祈り」に近い人物のほうですが、聖職者としての葛藤はあるものの、彼のテーマは「恋」なんです。エイモス家の三姉妹それぞれの恋愛の中で、長女バララとグンナルの恋が一番プラトニックな感じがします

ね。抱擁するシーンにしても、お互いに少年少女のようなぎこちなさがある。そのピュアな初めさが出せればと思っています。ただ、聖職者のセリフは会話というより、神との対話なんです。そういうセリフは、実に覚えにくい。一人で墓と会話をする場面の稽古を石井愼一が見て、「心もとなくて寂しそうに見える」と。テンとヤンが出て来ると急に生き生きとするらしい(笑)。確かにその通りで、安心して芝居の世界に入れるんですね。やっぱり芝居の面白さは人との会話にあり、相手のトーンでこちらのトーンも決まってくるわけです。それが出来ないのは手強いけれど、そんな弱音も言ってもらえません。何し

ろ達者な役者が揃ってますからね。蜷川さんが指示しなくても、自分の好きなところから出て芝居を始める。初めて立つ場面でも、すでに何回か稽古をしているようなレベルです。役者として錆びないためにも、こういう現場は必要ですね。蜷川さんご一緒するのは二度目ですが、前回の「雨の夏、三十人のジュリエットが還ってきた」の時に、「もっと早く一緒に仕事をすべきでしたね」と言っていたので、嬉しかったですね。今回も蜷川さんの思いに伝えられるように、何も考えずとも早口言葉のようにセリフが口をついて出て、舞台の上で自由に動けるようになるまで稽古に力を注ぎたいと思っています。

CHOROS

合唱隊

Q1.今「願いが叶う薬」があるとしたら何を願う?

Q2.これまでに「祈り」が通じた(又は通じなかった)という経験は?

Q3.「怪物」と聞いて思い浮かぶ人物やイメージは?

Q4.自分自身の中に「怪物」を感じたことはありますか?



Mame Yamada マメ山田

1. 芸人になって40余年。ひらすらやりたいもの、「白雪姫と七人の小人達」。これをぜひやってみたい。
2. 通じない事ばかり。阪神タイガース優勝!いつになったら??
3. 蛭川幸雄さん。美輪明宏さん。
4. いたって真面目、品行方正のワタクシに怪物がいる訳がない。

兵庫県出身。1967年、ルーキー爆笑劇団(大阪千日劇場)で初舞台。蛭川幸雄演出作品は「身毒丸」「ハムレット」「ロミオとジュリエット」「白夜の女騎士」「ファウストの悲劇」「海辺のカフカ」などに出演。近年は劇団☆A・P・B-Tokyo公演でも活躍するほか、「ちっちゃなエイヨルフ」「毛皮のマリー」、愛知芸術文化センター映像作品「アリスが落ちた穴の中」などに出演している。



Hiroshi Honjomaru 本城丸裕

1. 「宝くじが当たればいいなあ」……てなことは期待しない。今を一生懸命生きてます!
2. 通じたり、通じなかったりするものではないような気がします。
3. キングコング。
4. キングコングは感じた事はありませんが、イモムシはたまにあるかな。


東京都出身。1978年「王女メディア」を皮切りに、「近松心中物語」「ロミオとジュリエット」「NINAGAWAマクベス」「下谷万年町物語」「黒いチューリップ」「ハムレット」と蛭川幸雄演出作品に多数出演。映画、テレビでも活躍する。近年の出演映画に、大友克洋監督「蟲師」、園子温監督「希望の国」「地獄でなぜ悪い」(3月公開予定)、テレビドラマ「塚原ト伝」「陽だまりの樹」などがある。



Masafumi Senoo 妹尾正文

1. 1回読んだだけでセリフが入る事。
2. だいたい「祈り」は通じません。
3. やはり、この作品の演出家ではないでしょうか。
4. いやいや「小物」なので、「怪物」などはありません。

神奈川県出身。シェイクスピア・シアターを経てGEKISHA・NINAGAWA・STUDIOに参加、現在に至る。「コースト・オブ・ユートピア〜ユートピアの岸へ」「血の婚礼」「アントニーとクレオパトラ」「下谷万年町物語」「海辺のカフカ」「トイラスとクレシダ」「日の浦姫物語」など蛭川幸雄演出作品に多数出演している。



Tadashi Okada 岡田 正

1. もう一度人生やり直してしょ。
2. とても出演したい舞台に出演できたことですね。2作品!
3. そりゃ蛭川幸雄でしょ。
4. すっごいのが居ますよ〜。時々顔出します。

長崎県出身。「十二人の怒れる男」「サド侯爵夫人」「アントニーとクレオパトラ」「下谷万年町物語」「シンベリン」「トイラスとクレシダ」などの蛭川幸雄演出作品、「第17捕虜収容所」「ツアーアウト」「煙が目にしみる」「ミュージカル 太平洋序曲」などの舞台で活躍する。昨年末は自転キョ演劇部を立ち上げ「ボクのおばさん」を上演。



Eiichi Seike 清家栄一

1. 「願いが叶う薬」なんか飲んでも願いが叶わなくなりますように。
2. まだまだ、これから、これから!
3. この質問に「蛭川幸雄」に答える方、何人いるかな?
4. そんなこと教えてあげない。

東京都出身。1976年「オイディプス王」にコロスとして参加以来、蛭川幸雄演出作品に最多出演。近年の作品に「から騒ぎ」「冬物語」「コースト・オブ・ユートピア〜ユートピアの岸へ」「ヘンリー六世」「じゃじゃ馬馴らし」「血の婚礼」「アントニーとクレオパトラ」「下谷万年町物語」「シンベリン」「ボクの四谷怪談」などがある。



Kiyoshi Fukuda 福田 潔

1. 老いた母親の病を治す薬が欲しい。
2. 自分の人生。通じる、通じない、どちらでも。祈りって、見返りを望むものじゃないでしょ。感謝でしょ。僕はそう思います。
3. 戦争、兵器、人間、かな。
4. 自分に対する殺意だな。

神奈川県出身。「NINAGAWAマクベス」「王女メディア」をはじめ、蛭川幸雄演出作品に数多く出演。近年の出演作に、「ロミオとジュリエット」「白夜の女騎士」「あわれ彼女は娼婦」「コロネイナス」「カリギュラ」「から騒ぎ」「ヘンリー六世」「身毒丸」「あゝ、荒野」「トイラスとクレシダ」「日の浦姫物語」などがある。



Yukio Tsukamoto 塚本幸男

1. ちょっとはずかしいので、かんべん。
2. 祈りが通じたという経験はあるが……。うーん……。
3. かなり近くにいる人
4. 怖い怪物とすごい怪物。

兵庫県出身。「コリオレイナス」「ワア王」「表裏源内蛙合戦」「ムサシ」「たいこんどん」「身毒丸」「あゝ、荒野」「下谷万年町物語」「シンペリン」「ボクの四谷怪談」など多くの蛭川幸雄演出作品のほか、映画「アウトレイジ」「酔いがさめたら、うちに帰ろう。」「BOX～袴田事件～」「ばかもの」、CMなどでも精力的に活動中。



Kaiji Sawa 澤 魁士

1. 記憶が良くなる薬。
2. 家族が健康であることは無意識に願っています。
3. 共演者のマメ山田さんです。
4. 存在が怪物そのものです。

北海道出身。蛭川幸雄演出作品では「コリオレイナス」「カリギュラ」「表裏源内蛙合戦」「血は立ったまま眠っている」「ファウストの悲劇」「身毒丸」「あゝ、荒野」「下谷万年町物語」「日の浦姫物語」などに出演。そのほか、映画「ザ・マジックアワー」など。



Kazuhiko Noguchi 野口和彦

1. 永遠の願い……それは、子供を生んでみたい。
2. 「下谷万年町物語」のパンフレットに「今回は女優として蛭川作品に出演すること」と書いたら、「祈りと怪物」では女役(?)になった♡
3. 観客の皆様。我々役者にとって、神にも悪魔にもなります。
4. ある、ある 女の情念と男の腕力を持つ怪物(笑)

東京都出身。寺山修司に魅せられ「青蛾館」を旗揚げ。自らを見世物と名乗り「異能の女形」として独自のスタイルを形成。蛭川作品は「下谷万年町物語」に続き2作目の出演である。中屋敷法仁演出「アトミック☆ストーム」、「毛皮のマリー」と出演作が続く。



Yuri Shimizu 清水ゆり

1. 寒さに震えている人間も、動物も、暖かくなれる場所がありますように。
2. また会いたいと思っていた人がたまたま劇場で隣の席に座っていた時。
3. 朝の演員電車。静けさの中にある殺気立った空気の中にある怪物。あと、ピノキオに出てくる鯨。小さい頃本当に怖かった。
4. いけないと思っていた事が気付けば当たり前になっている「慣れ」という怪物。

桐朋学園芸術短期大学芸術科演劇専攻卒業。蛭川幸雄演出作品は、今回が初となる。近年の主な作品に、青蛾館「1999年の夏休み」、「さいあい〜シェイクスピア・レシビ」、「浅草版・くみ割り人形」。他にchairoi PURINダンス作品など。アコーディオン演奏活動にも精力的に取り組む。「かなかぬち〜父のみの父はいまさず〜」出演予定。



Mihoko Tsuchiya 土屋美穂子

1. 早く逝ってしまった父と母に逢わせてください、と。
2. マイクでスリップして吹き飛ばされ、スローモーションの中で「助けてください」と祈りました。気が付くと交差点の真ん中で私ひとりきり。車も人もいない。無傷でマイクも無事。生きてる!
3. 蛭川幸雄氏。この方しか思い浮かびませんデス。
4. 私の耳の奥に棲むちっちゃな火星人の様な土屋美穂子が時折り大暴れます。

東京都出身。劇団青年座所属。主な出演作に「ブンナよ、木からおいてこい」「見よ、飛行機の高く飛べるを」「パートタイマー・秋子」「モロッコの甘い危険な香り」「あおげばとうとし」「異」「桜姫東文章」「明日」「山火」。蛭川幸雄演出作品「幻に心もそぞろ狂おしのわれら将門」「メディア」「雨の夏、三十人のジュリエットが選んできた」などがある。映画、テレビドラマにも多数出演。



Teruko Horai 蓬莱照子

1. ヒミツです。
2. 引越したいなと思った時に引越が決まる。
3. 私の先輩・市川夏江さん。
4. 鬼です。

栃木県出身。「 Greeks」「真情あふるる軽薄さ2001」「天保十二年のシェイクスピア」「雨の夏、三十人のジュリエットが選んできた」「メディア」などの蛭川幸雄演出作品のほか、一人芝居「宮城野」を全国で上演。そのほかの舞台に「真景累ヶ淵」「ハム・アイラブユー」「美しい星」など。2011年には「てるてる坊主の会―蓬莱照子新内を語る。」を開始した。



Masaru Ikejima 池島 優

1. ニナガワの座。
2. 常に稽古場では祈りや願いは通じない。
3. 父親・ニナガワさん。
4. 人と違うことをしたがる怪物が、ボクを支配しようとたくらんでいます。

北海道出身。コンテンポラリーダンサー、振付家。俳優としても活動。蛭川幸雄演出作品では「ガラスの仮面―二人のヘレン―」「下谷万年町物語」に出演・振付、「美しきものの伝説」劇中劇「サロメ」、「身毒丸」「あゝ、荒野」「ボクの四谷怪談」の振付を手がけた。ミュージカル「ファンシー・ガール」、オペラ「オルフェオとエウリディーチェ」などに出演。



Maki Maehara 前原麻希

1. 絶妙なタイミングで挨拶が出来るようになります。
2. 私の祈りはいつも諦めた途端通じることがほとんどです。今回も役者のお仕事を一時休止していたところで、出させて頂けることになりました。有難さと恐怖で一杯です。
3. 自分が怪物と言われることが多いです。
4. 母親と接する時、暴力的になったり、道徳に反するような罵声を発している時、まだ自分が親離れ出来ていない怪物だと思います。

東京都出身。蛭川幸雄に師事し、演出助手になる。演出助手の傍ら、役者としてNODA・MAP「ザ・キャラクター」などに出演。自ら児童向け演劇のユニットを立ち上げ、脚本・演出を手がける。只今、日々迷走中!

合葬奇譚

蜷川幸雄×会田誠

10年前に会田誠さんに「合葬奇譚」の第1回目のゲストとして出ていただいた。
会田さんの「美しい旗(戦争回RETURNS)」やいくつかの作品に心うたれて、
是非お話を聞かせていたきたいと思ったからだ。
恵比寿駅近くのひっそりした画廊で見たその作品と会田さんは、静かな狂気を抱えた、
薄暗い空気の中で息をひそめているようだった。
あれからもう10年も経ったのか。

蜷川幸雄



A. 灰色の山 遠くから見ると美しい水墨画のような幻想的な山は、近寄って見れば累々と折り重なるサラリーマンの死体(左下写真)。北京に滞在し制作した作品。滞在中になぜか現地CMに俳優として出演したエピソードがエッセイ集に収められている。本対談の最終ページ、ツーショットの背景にある作品。2009-2011 キャンパス、アクリル絵具／300×700cm 撮影：渡邊修 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery

2003年『桜の園』公演プログラムから始まった「合縁奇縁」。蜷川幸雄が各界の異能与語り合うシリーズ初回を飾りご登場いただいた会田誠氏は、気鋭のアーティストとしてすでに当時注目を浴びる存在だった。今や六本木・森美術館で初の大規模個展が開催されるなど、その人気はとどまることを知らない。開催中の個展を鑑賞した蜷川は、その足で久々の再会へ。



灰色の山(部分)

アーティストの遠近調節術

蜷川 (開口一番) 相変わらずビョーキですね。すごいですね! ビョーキの進行ぶりが。
会田 そうでしょうかね(笑)。
蜷川 驚きました。さすが天才だと。
会田 いやいや、あのタイトル(「会田誠展:天才でごめんなさい」)は冗談ですよ。
蜷川 僕も昔団地に住んでたころ、表札に「蜷川幸雄 天才」って書いてたものですから(笑)。その気持ちは十分わかっています。
会田 そうですか。
蜷川 しかしまあ、^{ひんしゆく}響盛を買いたがってるのと、うまいなあ! っていうのと。よくあれだけ横道に逸れますね。勇気をもって。
会田 若い時より少しずつは穏健になってる気はしていますけれど。
蜷川 いやあ、穏健じゃないですね。すごいです。びっくりしました。お客さんが若いのがいいですね。



会田 僕のことを知っていて来る若い人も多いでしょうけれど、場所柄(六本木ヒルズ)デートスポットなので、間違ってくる人も多そうですね(笑)。

蜷川 イギリスのテート・モダンで見たダミアン・ハースト展も若い人たちが多くて、デートスポットのような雰囲気もありながら、最終的にはある衝撃を受けてみんな帰っていく感じで。

会田 欧米は現代美術展のお客さんは若い人が多くて、外国に行くたびに嫉妬というか、羨ましく思いますけどね。僕のはちょっと若い人も入ってるでしょうけれど、こんなのやと世界の普通くらいです。

蜷川 芝居と比べると、若いお客さんが多くていいなあ。俺ももうちょっと失礼な演出家になったほうがいいなあ、と思いましたよ。世の中の秩序に対して、逆らう度合いがもっと強くてもいいかな。最近まとまりすぎかな、と反省したりして。人の期待や評判を裏切りたいという思いはないですか?

会田 どうでしょうね、裏切るほど、まだあんまり褒められたこともないでしょうね。

蜷川 そんなことないでしょう。二本(※)も拝見しましたが、中国で俳優をやられた話もおかしいですね。あの絵(*前ページA)はどれくらいで完成したんですか。

会田 サラリーマンが死んでるやつですね。足かけ2年半くらいでしょうかね。作業をギュッと凝縮すれば1年くらいでしょうけれど。

蜷川 隣に誰を持ってこようとかいうのは、描きながら「あれを増やそう」という風にどんどん筆が進んでいくものなのでしょう。

会田 適当ですね。自分や友達をモデルに撮った写真を小さくプリントアウトしたものを花札みたいに手に持って、一枚たまたま取ったやつを見て「ここかな」と置いていく。その繰り返しみたいな感じです。

蜷川 描いている時は近いでしょうけれど、途中で離れて全体を

見たり、行ったり来たりするものなんですか。

会田 そうですね、全体の調整にしばらく専念する時と、ひたすら人間を増やそうという時と分けたりもします。いろいろです。

蜷川 なぜそんなことを聞かかというと、演出をやっている時も、間近で見ている時と、劇場の二階に駆け上がって見る時と、両方なんですね。体力がなくなったというのもあるんですけど、ある年齢まで行ったら、同じ場所にも全体が何となく見えるんです。でも、時には無理して上がらないと視点が甘くなったりするので、遠近を自分で調節しながらやってるんですけど。そういうこともあるのかなと。

会田 それはとてもありますし、大きい絵で、かつ縦が長いものは梯子やイントレ(組み立て式の足場)に登ったりして描くんです。やっぱり遠くから見ないといけないので、降りて、遠くから眺めて、また登ってを繰り返す。すると登山の時のようにふくらはぎが筋肉痛に

(※) 会田誠著「美しすぎる少女の乳房はなぜ大理石でできていないのか」(幻冬舎刊)。好評のエッセイ集第2弾。



B. 電信柱、カラス、その他
六曲一隻屏風の作品。倒れかけた電信柱には電線がからみつき、カラスは様々な人間の痕跡をくわえている。
2012 パネル、キャンパス、アクリル絵具(六曲一隻屏風)／360×1020cm 撮影：渡邊修 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery

なりますね。最近、作品が巨大化していて、もともと身体がそんなに強いほうじゃないので、なおさら年々体力が落ちてきていることがわかる。それで高さ4メートルとかあるような大作はもうあと10年くらいしか描けないかなと。もう少し年とったらごちまりしたサイズのものにしとこう、と思ってます(笑)。

蛭川 年齢的に、もうちょっと行けますよ。

会田 いや、それは蛭川さんが……(笑)。

蛭川 若い時のほうがディテールまで気を使っていきいきと描くことができるかもしれないですけど、僕も年を取って、違う形でもまだ大きな作品できるな、とは思ってますね。もう一回復活するんです。ですから、どんどん大作を描いて、大いに響きをかってください。

会田 そうですか。

蛭川 演出って仕事も頭脳の作業ばかりじゃなく体力勝負でもあって。今も、もうすぐイスラエルに行くんですけど、アラブ系の俳優とユダヤ系の俳優と日本人の俳優と、3カ国語での芝居をやっているんです(『トロイアの女たち』)。これが発狂するくらい大変なんですね。ユダヤ系俳優に5分喋ったら、アラブ系にも5分喋るというように均等にしないと、「こっちのほうが短い」とクレームが出る。それで行ったり来たりしてる。そういうことも含めて体力のうちだろうと思うんですが、今、僕は77ですけど、まだ出てますから。

会田 イスラエルのと、今度のKERAさんのと同時にやってるんですよね。すごいですよ。

蛭川 画家もそうでしょ。絵の具が乾くまで。

会田 どうでしょうね、規模が違うので。僕も2つ、3つの絵の同時進行はありますけれど、そんなに大変じゃないです。

身体と頭とイメージと

蛭川 今は具体的に、大作をお描きになってるんですか。

会田 情けないことに、もうすでに展覧会が始まっていますが、出来上がってなくて……。電信柱の(*前ページB)もそうなんですが、女の子がいっぱいいる横長の絵(*次ページC)が全然出来てないんです。夜中にこそそ加筆してます。

蛭川 そういう自分の作品を深めていくとか、細かく加筆していくのは、すごく楽しいことなんですか。

会田 楽しいのは少しだけで、辛いことが多いです。でも、もうやるしかないという感じでしょうか。

蛭川 絵というのは、年齢に従って、技術的にどんどんうまくなっていくんでしょうか。

会田 まともな絵描きはそうでしょうけれど、僕はつくづくまともな絵描きじゃなくて、これではいけないなど。毎日のように筆を取ったりしない、展覧会が近くなって慌ててやるような人間なので、毎回、絵の描き方を半ば忘れてる感じです。準備体操的なリハビリをやらないとダメなんですね。継続しなきゃいけないと分かりつつ、どうしてだか、そんなヤツなので、悲しいことに僕は、デビューからあんまり絵はうまくなっていない気がしています。

蛭川 うまくなりたくない、っていうのはないんですか。

会田 ちょっとはありますけどね。毎日やるのはいいことでしょうけれど、マンネリとかデメリットはあるでしょうから。僕のやり方だと新鮮味はあるのかもしれないですけど。どの作品でも最初に描く時、どうやって描いたらいいのか途方に暮れて、素人みたいな気持ちで始まるんです。相変わらず成熟しないな、と思いながら。まあで



C. ジャンブル・オブ・100フラワーズ(部分)

縦2m、横17m以上に及ぶ大作。明るく笑う少女たちの身体からイチゴや金貨や蝶が弾け散る。2012-(制作中)キャンバス、アクリル絵具／200×1750cm

撮影：渡邊修 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery



D. あぜ道 日本画家の巨匠・東山魁夷の『道』を引用した会田誠の初期代表作の一つ。1991 パネル、和紙、岩顔料、アクリル絵具／73x52cm 豊田市美術館蔵

撮影：宮島徑 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery

も、これが僕の自然なスタイルなので仕方ないという感じですが。

蛭川 描き始めは、絵の中心的な、たとえば少女と何を組み合わせようとか、それくらいはあるんですか。

会田 それはありますし、構図を構成する上では、そんなにプランクはデメリットにならないんです。でも、筆と絵の具の手の慣れなんかは、やってないと鈍なまるんですよ。

蛭川 最近僕は演出プランがなく、ほとんどノートも描きこまいません。稽古が始まるまで会田さんの画集や、関係ないものを見たりしてるんですね。稽古初日に口から出てきたもので創る。「7、8メートルのテーブル創って」と言うとみんながバタバタと創り始めて、その周りに俳優を座らせてみて「あ、ラップで行こう」と言ったり。ここ5年くらい、ほとんど即興です。その即興が、身体と頭と、イメージが一致すると面白いように滑り始めるんですね。昔は物も食わずに何日も徹夜してやってみたりしたんですけど。最近はそれをやらなくても、突然浮かんでくるんです。芝居はほぼ集団の作業ですから、スタッフがいて、どんどんいろんなものを創ってくれる。きっと画家だったら、筆とイメージと肉体が一体化して描けると、すいすい行けるのかな、と。それと似たような瞬間が持続できると、わりと芝居の上がりがいいんです。オーソドックスな演出家や批評家に言わせれば、「そんなものは邪道だよ」ってことになるかもしれないけれど。最近はそんな風に動物的に作るのが面白くて。会田さんも、自分の内面と肉体が一致してくるような状態が本当はいいんでしょう？

会田 そうですね、描き始めるとだんだんノってくることは確かです。ノってこないとヤバいんですけどね。今回は展覧会が始まる1ヶ月前くらいにやっとエンジンがかかってきた感じで、遅すぎるんですけど。夜中に美術館に忍び込んで描こうとしても、スイッチが入ら

なかったり。絵の前で呆然とどうしたらいいかわからなくて、一晩中ほとんど動かずにダラダラしてたこともありました。描きたいもののイメージはあるんですが、実際に平面に移し替えてみると、「もっと理想は高かったはずなのに……」というギャップに苦しむんです。今回は大作だったせいでコンピューターの力を借りてしまって、そのおかげである程度間に合ったのも事実ですけど、調子が狂っちゃった面もありますね。現代のテクノロジーだから、使えるものは使おうと思ってやったんですが。

蛭川 違いましたか、やっぱり。

会田 ええ。キャンバスにゼロから手で描いたのとは違いましたね。コンピューター上で組み上げたものをプリントアウトして、そこに絵の具で色を載せていくという普通じゃない描き方をしてるので。なんかリズムが狂ってるんでしょうね、スイッチが入りにくくて……。自分の嘆きを言ってもしょうがないんですけど(笑)。

蛭川 どうぞ嘆いてください(笑)。

「おこがましさ」を見せる

蛭川 10年前、対談に伺った時に見せていただいたような小さいサイズの絵は、今はお描きにならないんですか。

会田 『あぜ道』(*D)とかですね。そう決めてるわけでもないんですけど……。こういう広い美術館でできる機会をもらえたので、デカイのを描いたほうがいかなと単純に思ってます。

蛭川 大きい絵と小さい絵はまったく違うものなんですか。

会田 違うでしょうね。大きい絵は、ある意味看板のような存在感になっていきますよね。でも、大きければ素晴らしく立派な絵になるわけ





E. 犬(雪月花のうち”雪”)

エロスと残虐性が交差する衝撃の美少女シリーズの一作。

1998 パネル、和紙、岩顔料、アクリル絵具、ちぎり絵用の和紙／73x100cm

撮影：宮島隆 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery



じゃないということは実際にやっても思うし、やる前から気づいてるんです。デカイと存在感が希薄な絵になるとも分かっていて、今のところ大きいのを中心にやろうと……。うーん、うまく言えないな。

蜷川 芝居も、それとまったく同じかどうかわかりませんが、100人か200人くらいの小さなスペースでやる舞台の演出と、今、僕がやってるのはだいたい800人くらいの劇場の大きさなんですけれど、大きいのはちょっと難しいなと。客席も大きくなりますから、一体感とか、緊密感がお客さんに届く舞台というのは、小さいほうが創りやすいんですね。大きい会場で作る舞台は、構造力がないとまとまらないんです。それと、確かなテクニックが必要で、いい俳優が20人はいないと大きい劇場はもたない。小さい劇場は1人が2人でできるけれど、大きな空間を支配できるだけの20人のいい俳優というのは、なかなかいないんですよ。テクニックがあり、多彩な演技を繰り出してくれないと成り立たない。この間、劇場の廊下とか物置のような場所を使って、50人くらいしか観られない芝居をやったんです(さいたまネクスト・シアター『ザ・ファクトリー2』)。それはそれで緊密感があって面白いんですね。その2つを、なるべく行ったり来たりしながら、人生の終わりにしようかなと思ってるんですけど。

会田 なるほど。何か、とてもわかる……。つもりですけど。最近、『モニュメント・フォー・ナッシング』というシリーズを4つやっていて、今回そのうち3つ出てるんです。とにかくバカでかいということが特徴の作品で、もともとこういう現代美術館のように天井高が6メートルあるようなスペースにどう関わろうかという、前提ありきのシリーズなんです。この稼業をやっているのに変なことですけど、僕は、現代美術館のデカすぎる感じ、天井が高すぎる感じが、どこかおかしいと思っていて。人間に心地いい大きさを超えているし、一人の作家が受け持つのはおこがましいスペースだと思う。でも、そのおこがましさを逆にとるというか、おこがましさを自分に見せるとい

う、屈折したシリーズなんです。評判がいいかどうかはわからないんですけど、最近はそのことを少しやっています。

蜷川 わかるような気がするな。人間が見たり、わかったりする適切なサイズというのは、やはりあるような気がするんですね。でもね、それをやっている飽きてきて、適切で快適な空間を壊したくなるというところが僕はありますね。会田さんにもおありだろうけれど。

会田 まあ、人間には、膨張したくなっちゃう悪い癖があるような気が……。男には、かな？ 半分はあまり褒められるものじゃないと思いつつ、僕にも膨張して力でねじ伏せて、何か権力を行使したいという、悪い誘惑だと思うんですけどね(笑)。半ば、えげつないと思いつつ、デカイのに挑戦するというのが、最近の傾向ですね。作戦としては、中年の間にデカイのを飽きるほどやって、老年期になったら、等身大に戻るというストーリーを勝手に(笑)。

蜷川 絶対取まらないと思う(笑)。僕はね、デカイのに対してあまりにも批判されたから、デカイのも小さいのも、外国語もみんな同じだと立証したくて、力み過ぎているところがあるんです。意固地になってるという狭さを僕は持っているかもしれないですね。反発バネで物を創るような悪い癖があって。育ちが悪いのか(笑)。

会田 僕もたぶん、反発をモチベーションにするというのはあるタイプだと思いますけれどね。たとえばモダニズム絵画とか、フォーリズム(※)とか。

蜷川 ああ、聞きたかったんです、それ。

会田 僕はそういう前衛からはだいたいバカにされてるんです。ソレ系の絵画をそのまま描くというわけではなくて、ソレ系の絵画と絡んだ何かをやろうとしてしまい、僕のコアなお客さんからしたら

(※)フォーリズム 内容に対して形式的要素から作品を解釈しようとする美学的傾向。

「そんな無駄な仕事やらなくていいのに」と思われるような、抽象画を描いているところをビデオで撮ってみたい。同じ現代美術という畑の中に、僕とはとても違う立場の絵描きや評論家がいる、悪口言われると「コンチクショー!」とも思いますけれど、でも、それを無視して火花も散らず穏やかに棲み分けるのは、ちょっとつまらないとか。全面的に戦争したいわけじゃないけど、チョッカイぐらい出さずには我慢ができなくなるというか(笑)。

蜷川 僕もちょっと似てるな。貧血症の弱った演劇はやダヤダ、っていうね(笑)。概念だけマネしてるような演劇はちゃんちゃらおかしいと思って、僕もついムキになって違うものを創ろうとしすぎるところはありますけれど。

会田 僕も美大の油絵科出身なので、抽象画も学生時代にちょっと試してみて、あまり向いてないと思ってやらなかっただけなんです。自分の中にも要素としてはあったはずで。たまたまデビューの時に、ちょっと和風で変態チックな描き方で人に覚えられたから(*前ページE)、それが僕の芸風のようになりましたが。それに「なんちゃって日本画」のほうも、僕の魂の深いところに食いついてるわけじゃなくて、いろいろ試した中のひとつ、というところもあるんです。

蜷川 会田さんは漫画のような作品でも線が完結しないですね。描写力があるわけだからかっちり描こうと思えば描けるはずですけど、一見、描きなぐったようになっていて、絵そのものが完結していない。ああいうものを書く、あるいは創る心理的なものは何ですか。

会田 誰でもそうでしょうし、蜷川さんは特にそうでしょうけれど、自分の中には本当にいろいろな要素があって、働き者と怠け者のように、相反する要素が多分にあるんですね。本当は徹底的なナマケモノで、頑張ったり努力したりするのがつくづく嫌いなんです。おにぎりの頭をしたウンコしてるヤツ(*F)は最近僕が推してるキャラというか世界観で、スーパーナマケモノみたいなヤツなんですね。僕の半分の自画像なんです。絵の描き方にしても、思いっきり“頑

張らない”描き方というの、どうしても好きで。あと、最近では、緻密で和風な線をきっちり描くような、西洋絵画を中心とする現代美術では邪道な描き方をムリにやってみたりしてます。でも、自分が仕掛けておいて、本当はこの描き方は肉体的には好きじゃない、という……(笑)。根っこから矛盾があるんです。

蜷川 いやあ、やっぱりすごいですね。僕は会田さんみたいな大病を患ってないから、まだまだです。今日、「俺はまだビョーキ度が足りないな」って反省しました。

会田 うーん、どうなんでしょうね??

蜷川 いや、いいです。格好いいです。この10年の間にビョーキが進行して嬉しかったです。

会田 ハハハハハ!

会田誠 Makoto Aida

1965年、新潟県生まれ。漫画家、小説家、映画監督、絵描きなど何らかの表現者になることを目指して上京する。91年、東京藝術大学大学院修了。美少女、戦争、サラリーマンなど、社会や歴史、現代と近代以前、西洋と東洋の境界を自由に往来し、奇想天外な対比や痛烈な批評性を提示する作風で、幅広い世代から圧倒的な支持を得ている。ミヅマアートギャラリーでの個展を中心に国内外の展覧会に多数参加。最近の個展に、『Bye Bye Kitty!!! -Between Heaven and Hell in Contemporary Japanese Art』(ニューヨーク、2011)、『Diena ir naktis』(リトアニア、2011)など。著書に、『カリコリせんや生まれけむ』、『美しすぎる少女の乳房はなぜ大理石でできていないのか』(共に幻冬舎刊)など。ドキュメンタリー映画『会田誠』、『駄作の中にだけ俺がいる』がある。

★3月31日まで、六本木・森美術館にて大規模個展『会田誠展：天才でごめんさい』を開催中！ 対談中で触れられている作品はすべて出展されているため、大きさも含めてぜひ自らの目で確かめてみてほしい。深い森に分け入るようなめくるめく会田ワールドは1回の鑑賞ではとても堪能し尽くせないかも……



F. 考えない人

こちらもある意味衝撃シリーズ。半開きの瞼が哲学的。おにぎり仮面が旅するビデオ作品など様々に展開中。おにぎり仮面はリトアニアの草原でウン◎も垂れる。

2012 FRP、その他／h300cm 撮影：木奥恵三 ©AIDA Makoto Courtesy Mizuma Art Gallery





合
藝
奇
巒